

# 発 明 文 化 論

〈第 56 回〉

丸山 亮

## 死後の観念

先ごろ脳死と判定された幼児の心臓が、別の子供に移植された。脳死の子供からの臓器提供が可能となって以来、6歳未満では初のことだった。子供の両親は、息子が誰かの一部となり長く生きてくれるのではないかと思うと語っている。生体としての心臓はたとえ移植が成功しても、元の細胞があり続けるわけではなく、いわゆる動的平衡を保ちながら古い細胞は新しい細胞に置き換わっていく。にもかかわらず、子供の死後も心臓が生き続けると信じることは可能だろう。

古代エジプトでは、冥界が実感されていた。死後に赴く来世が安かれと願う気持ちから、死者のための呪文を表した死者の書が作られ、棺の中に入れられた。そこに添えられた挿絵を見ると、古代エジプト人が死をどう観念していたかがわかる。心臓には自由意思があり、人格と密接な関係があると考えられていたらしい。このため冥界の王による審判では、心臓を真実の象徴とともに天秤にかける場面が描かれる。生前の行いが悪いと判定されると、心臓は脇に控える怪物の餌食となり、うまく審判を潜り抜けると、永遠の生命が約束されて、生前に変わらぬ生活が営まれることになる。

古代ギリシャの神話でも、冥界は同じように現世とつながった構造であった。有名なオルフェウス神話で、愛妻エウリディケを失ったオルフェウスは、三途の川を渡り、冥界の王と王妃に会って、エウリディケを地上に連れて帰ることを許される。けれども地上に出るまで妻を振り返らないという約束を最後のところで破り、振り返ってしまう。すると、エウリディケは再び闇のなかに消えていく。

同様な神話は日本にもある。妻のイザナミを失った夫のイザナギは、妻に会うため黄泉の国へ赴いて会うことが出来た。ここで妻は地上に帰れるよう黄泉の国の神と交渉してくるからその間自分を見てくれるなど言ったにもかかわらず、禁を破ってイザナギはイザナミを見てしまう。すると蛆のたかったおぞましい姿になっていた。それからは、恥ずかしい姿を見られて怒ったイザナミが逃げていくイザナギを追いかける物語となる。いずれにしても、生者が死者を訪ねて冥界に行くところと、無事に連れ帰るには姿を見ないという禁忌を守る必要があるところは東西の神話で共通し、冥界と地上の現世とには一線が画されている。

キリスト教も仏教も、他界の観念を十分に発展させた。ダンテの神曲では生者ダンテが地獄や煉獄を訪れ、死者に再会しているし、輪廻思想を取り込んだ仏教も、死後の世界観が豊かだ。その無常観を反映した平家物語は、壇ノ浦の合戦で滅亡する平家を語り、二位尼が安徳帝を抱いて入水するとき「波の底にも都の候ふぞ」と言わせている。

宮沢賢治は熱心な日蓮宗の信者だったが、死後の世界が生者の世界と通う独特な世界観を持っていた。「銀河鉄道の夜」ではタイタニック号の遭難で死んだ人が生者と出会う、汎宗教的で不思議な場面を描く。

俳人の金子兜太氏は他界観をこう語っている。「死ぬということは、いのちを格納している器、自分の外形が死ぬということだね、命そのものは永久に死なない。この世で格納しているものがだめになったら、次の、別のところに行って格納してもらおう。はまりこむ。そこでゆっくりと生活するということ」(朝日、12.6.8)。この死の観念は、古代神話からそう遠くない。

最近の私たちの宇宙認識は、科学的知見によってずいぶん変わってきた。そもそも宇宙が永遠とは言えなくなってきたようだ。こうした宇宙観の変遷が、現代人の死後の観念に何らかの影響を与えることもあるだろう。

(まるやま りょう 共生国際特許事務弁理士)